

落選作と連作－近代日本美術「書き直し」のための問題提起

趣旨

木下直之

創立 40 周年を記念して開催した昨年の国際シンポジウムでは、近代日本美術の「書き直し」をうたった。最終ゴールがあるわけではなく、「書き直し」は不斷に行われなければならないと思う。そのための試みとして、ふたつの観点を提起したい。ひとつは「落選作」を、あとひとつは「連作」を視野に入れることだ。

美術史研究は、ある意味で、もっぱら「入選作」を相手にしてきたといえるかもしれない。展覧会に限らず、市場でも出版でも美術館でも必ず選別が行われる。そこから外れたものは、いうまでもなく残りにくい。「入選作」の陰には膨大な「落選作」がある。そして、それにはさまざまな理由があつただろう。考えるに値する理由もあるはずだ。

「連作」もそれによく似た問題をはらんでいる。作者はそれなりの理由があつて連作としたのだが、しばしばその中の 1 点だけが注目され、やがて他の作品を忘却に追いやる。いったんそれだけが取り出されると、全体像がわからなくなり、作者の意図も見えなくなる。1 点だけに光が当たり、展覧会や出版で繰り返し取り上げられ、それは初めから単独作品であったかのように受け止められてしまう。制作時に、あるいは発表時に、もう一度立ち返れば、明らかになることがあるはずだ。

田添幸枝《力の体現》と本郷新《わだつみのこえ》を手がかりに、「書き直し」を試みたい。

田添幸枝《力の体現》－東京勧業博覧会に落選した裸体画

吉田暁子

田添幸枝（1867-1944、旧姓中尾）は明治期にアメリカで美術教育を受け、帰国後は自らも教えた画家である。本発表では、写真図版のみが知られる田添の代表作《力の体現》を取り上げ、同作が 1907（明治 40）年の東京勧業博覧会に落選した顛末を文献によって確認し、同作の表現について検討する。

幸枝は長崎県に生まれ、1887（明治 20）年から活水女学校に学んだ後、オハイオ州のウェズリアン大学で 1890（明治 23）～1893（明治 26）年まで美術を学び卒業した。帰国後、社会主義者の田添鉄二（1875-1908）と結婚して東京へ移住、1903（明治 36）年に東洋女藝学校を創立、1906（明治 39）年に同校を退任し西洋美術協会を創立して画技を教えた事績が報道からたどれる。鉄二の急逝後に中国へ渡り、晩年は帰国して 1944（昭和 19）年に没した。

『力の体現』は初老の男性の半裸像を描いた油彩画であり、幸枝はその制作意図について、「多数同胞平民の寂しき心に強き『力の自覚』を與ふること」等と『平民新聞』紙上で述べた。同作は東京勧業博覧会に応募され、門下生全員の作品と共に落選した。事後、本人による抗議文と、帝国ホテルでの落選展開催、平民社への『力の体現』輸送の経緯を報じる記事が同紙に掲載された。

東京勧業博覧会美術部門の審査を巡り生じた種々の軋轢は、文展成立前夜の「美術」概念の混乱を示す例としてしばしば取り上げられてきたが、『力の体現』の引き起こした騒動が注目されたことはない。理想を表す裸体画という、西洋に学んだ近代日本美術の中心的要素を備えた同作が排除され、以後顧みられなかつた理由に、社会主义との結びつきへの危険視があつたことは間違いないが、絵画の解釈としては不十分である。本発表では、写真図版という制限下ではあるものの、美術作品として発表されつつ鑑賞を拒まれてきた『力の体現』の表現について、改めて検討したい。

あと三つの『わだつみのこえ』

木下直之

本郷新は、1950（昭和25）年正月に日本戦没学生記念会（わだつみ会）から「日本戦没学生記念像」の制作を依頼され、その年の8月15日に男性裸体像を完成させ、像の足元にその日付を刻んだ。『わだつみのこえ』と名づけて、9月の新制作派協会展に石膏像を出品した。わだつみ会はそれを鋳造する資金を集め、完成作を東京大学図書館前に設置し、12月8日に除幕式を行うことを目論んだ。しかし、東京大学はそれを拒否、翌51年の五月祭で二日間だけ構内に設置されたことはよく知られる。

一日目は校舎内に置かれ、それを不服とした学生たちは翌日に図書館前広場を望む屋外に持ち出した。その時に、『わだつみのこえ』のすぐ傍らにもうひとつの『きけわだつみのこえ』が置かれていた。これは本郷新の作品ではなく、わだつみ会のメンバーでもあった佐藤俊一の手になるものだった。一見レリーフのようだが、絵画かもしれない。まずは、これが沖縄の宮古島で餓死した閑口清の最後のデッサンから生まれたものであることを明らかにしたい。本郷のそれに1年先行するもうひとつの『わだつみのこえ』像であった。

東京大学から設置を拒まれた本郷の『わだつみのこえ』は、その後53年に、立命館大学に引き取られたものの、69年に学生によって破壊された。現在は、同大学国際平和ミュージアムに置かれている。しかし、それはあくまでも「日本戦没学生記念像」であった。それが美術作品となるのは、札幌彫刻美術館（81年）、神奈川県立近代美術館（84年）、世田谷美術館（86年）に相次いで収蔵されたからである。

こうして直立する男性裸体像である『わだつみのこえ』だけが知られるようになったが、本郷は1951年に『塔』『わだつみのこえ』、翌52年には『わだつみのこえ（連作第三部）』をそれぞれ新制作派協会展に発表していた。前者はなぜか女性裸体像であり、後者は男性裸体像ではあっても横たわっており、いずれも第1作とは著しく異なり、かつ第1作を補完している。本郷がそれらを連作とした意図はどこにあったのだろうか。